明治時代における陶磁器の収集　京都市立芸術大学芸術資料館館蔵品から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2022-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 畑中, 英二 メールアドレス: 所属:
URL	https://kcua.repo.nii.ac.jp/records/402

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

明治時代における陶磁器の収集
京都市立芸術大学芸術資料館館蔵品から

A Collection of Ceramics from the Meiji Era:
The Collection of the Kyoto City University of Arts Museum

Eiji Hatanaka 畑中　英二

桃山陶器は多彩な釉薬を用いることによる色彩の豊富さ、ロクロ成形にお決まりの円筒形からの離れた自由な造形、日本のやきものにおいて初めて筆で文様を描いたことなど新しさを前面に押し出したものであり、今日的にみても非常に興味深いものである。京都市立芸術大学の学生とともに企画した展覧会（『桃山デザイン』京都市考古資料館、2021 年 12 月 5 日～ 2022 年 1 月 16 日　畑中研究室編 2021）においては、京都市内から出土した桃山陶器を中心に取り上げるとともに、桃山時代の工芸、とりわけ陶器に描かれたデザインの面白さに着目して学生たちが制作した作品をともに展示した。

展示を作り上げていく中で、今日では確かな評価を得ている桃山陶器の流行は、16 世紀末から 17 世紀初頭にかけての 30 年間に満たず、その後 20 世紀までほとんど省みられることがなかったという事実についてその経緯と内実について明らかにしていく必要があると感じた。

本稿では、筆者にとって身近な京都市立芸術大学芸術資料館における明治時代の陶磁器収集について取り上げることにより、その一端を明らかにしていくこととする。

1　近代における桃山陶器の位置付け　問題の所在

ここでは近代に入ってから桃山陶器が評価される経緯について簡単に触れることとする。

まずは大正 3 年（1914）東京帝国大学心理学教室（大河内正敏・奥田誠一）にて「陶磁器研究会（彩壺会）」が設立され「お茶にとらわれたり、骨董趣味的な鑑賞に偏したりすることなく、科学的に東洋古陶磁を研究しようと」画期的な試みが進められ、この会は「大正から昭和にかけてわが国陶磁器界の中心となり、講演、出版、展観などによりわが国陶磁器界に大きな業績を残した」と評された（小山 1979）。ここでは柿右衛門、鍋島、古九谷などの色絵磁器、仁清、乾山、道八などの京焼に加え、陶磁器の鑑賞法についても活字化されたが、桃山陶器についての掘り下げは見られないことは着目される。

同様に荒川豊蔵は以下のように当時のことを振り返っている。

「志野や・黄瀬戸・織部などは昭和のはじめごろまでは、一般茶人では愛用する者が比較的少なく、益田鈍翁、原富太郎氏など一連の人たちがこれを愛したにすぎない。鈍翁は名古屋へくると侘びもの目ききの美術商・横山守雄氏が気に入りで、それらのものを彼から多く手に入れた。また、専門の研究家も少なく、奥田誠一氏も大正十二年発行の『陶磁器百選』（これは原色版でまとまった本としては、はじめてのものかと思うが）の中で、志野香炉（すすきにすぎな模様）を志野窯変と説明していたが、陶片発見後は鼠志野などというようになった。織部も徳川末期頃の鉢が一点でているにすぎないのを見ると、桃山の古いものの認識が足りなかったと思える。」（荒川 1973）

しかし、第一次世界大戦（1914 ～ 18）の好況と戦後不況（1920）によって富裕層の没落により蔵に秘められていたものが流出するようになった。当時のことを奥田誠一は以下のように振り返っている。

「欧州大戦の結果我が財界の好況と戦後財界不況の変動は積極的にも消極的にも色々な動揺を伝えて、旧諸大名や富豪の宝庫が開かれ、数百年来世の風に当てられなかった珍什佳器が公衆の面前に暴露される様になって、一般人士の芸術品に対する鑑賞欲は一時に盛んになると同時に、これが刺激に依って工人は製作に活動せねばならぬ様になった」（奥田 1928）。

そこで「数百年」の時を経て登場したのが桃山陶器であり、それをいち早く評価し言語化したのが北大路魯山人であった。

「全く支那風の感じを失って、純日本式に出来上がって

いる（……）世界的にその比を見ないといって宜いほどに、芸術的価値を持つものである」（北大路 1931）と述べ、また織部については「織部の特徴の一つは、まずその絵の巧妙なことをあげねばならぬ。が、更に又最も取りあげておくべきことは、矢張り全体の感覚から受ける独創的な点である。これだけは支那にも西洋にも全く類例のないものをもっているのである。意匠といい、型といい、独り日本人のみが有するところの独創的なもので、この点の表現に成功したということはいくらやかましくいっても、威張ってもよいと思う」（北大路 1940）と述べている。

魯山人が強調した「日本人のみが有するところの独創的なもの」という評価は大きな時を待たず広がり、帝室博物館本館開館を記念して昭和 13 年に開催された『復興開館陳列展』（東京帝室博物館 1938）や同年に同館が刊行した『日本美術略史』（北原・藤岡 1940）において反映されるようになる。とりわけ備前、信楽、伊賀などに「唐物とは対蹠的な稚拙美とも称すべき妙味」「独特の陶磁美」が見出された。さらに、桃山時代になると、茶人によって発見された「陶磁の特異性」が極度に発展し、指や箆で器面に自由な変化を加えて塑造的な効果を与え「作者の個性を端的に器物に表現」した茶器が作り出されるようになった。そして、そのような器物が作り出されるようになったことを、同書では日本陶磁の「新しい飛躍」「本邦窯芸独特の発達を示す」ものとして評価されるようになった。

帝室博物館の出品作品を紹介する名品図録として出版された『名陶大観』においても先の評価は踏襲され「器形は前代と異り、舶載陶芸の影響を完全に離脱した本邦独特の所謂日本的な姿を形成し、殊に茶碗、鉢などの茶陶にそれが顕著であって、轆轤を用いて成形した器面に指頭及箆を加えて種々な変化を与えている。この技法は近代の洋式彫塑法と相通ずるもので、他国に類なき本邦独特の窯法である」（田中 1942）とし、日本人が中国当時からの影響を脱し、日本人の美意識に基づいて日本独自のやきものを作り出した時代として桃山時代を位置付けるとともに、桃山陶芸を西洋の近代彫刻の先駆けとし、さらに、桃山時代の茶陶を「作者の個性」を器物に表現した日本独特のやきものとして捉える陶磁史観がここでも示されているとされる（木田 2014）。

また、当時、東洋陶磁研究所で『陶磁』誌の編集に携わっていた小山冨士夫は荒川豊蔵の初個展（昭和十六年）の目録に寄せた序文で、地理的にも歴史的にも日本の真ん中である美濃で、最も日本的な特質を持つやきものの再生に取り組んでいる荒川豊蔵の仕事が日本人にわからないはずはないと述べ、荒川豊蔵の志野復興を「日本的なもの」を創出する取り組みとして評価するとともに、帝文展を舞台に活躍する「工芸美術」の陣営の工芸家を「薄っぺらなモダニズム写しの自称作家たち」と皮肉を込めて批判しており、「工芸美術」に対抗する日本独自の工芸のあり方を予感させる取り組みとして荒川豊蔵による桃山復興に期待を寄せていたことをうかがわせる（小山 1941）。

第一次世界大戦を契機にした富裕層の没落に伴って世に出ることになった桃山陶器に着目した北大路魯山人、荒川豊蔵ら作り手たちは「桃山復興」の担い手と目され、西欧の美術概念に沿うようにして成立を見せた「工芸美術」の対抗軸として日本独自の工芸のあり方を新しく確立しようとする意思が働いていたとも考えられている（木田 2014）。この流れは 1950 年代に「伝統工芸」が確立される源となっている。その経緯を知らない私たちにとっての桃山陶器は、登場したその時から不動の地位にあると錯覚してしまっているのである。

2　京都市立芸術大学芸術資料館蔵品について

先に述べたように、第一次世界大戦の頃までは桃山陶器は等閑視されていたことになるが、ここでは京都市立芸術大学の収蔵品からその実態についてみてみることにする。

なお、収集の意図が何処にあったのかを主眼にしていることから、今日的な認識に基づくと作品の真贋については検討を要するものもあるが、ここでは取り扱わない。

2-1　収集の経緯

まず 1894 年 12 月に 21 点が購入され、ここには尾形乾山をはじめ永楽保全、清水六兵衛（初代）、高橋道八（三代）に加えて璋州窯のものが含まれる。1895 年には 2 月から 12 月にかけて五月雨式に 6 点が購入され、清水六兵衛（二代）、尾形周平（二代）などが含まれる。同年 5 月と 9 月には瑠璃釉糸巻形香合と蛍手白磁杯が寄付されている。1896 年 2 月から 5 月にかけて 14 点が購入され、青木木米、楽只亭嘉介、水越与三兵衛、御菩薩焼、粟田焼など京都のやきものに加えて酒井田柿右衛門や伊万里（古九谷）、美濃の黄瀬戸芦文茶碗が含まれる。1897 年 1 月から 12 月にかけて 43 点が購入され、楽宗入・左入・長入・了入・旦入、野々村仁清、尾形乾山、永楽保全・和全・回全、青木木米、水越与三兵衛、押小路焼、角倉一保堂、のほか酒井田柿右衛門、湖東焼が含まれる。1898 年 1 月から 9 月にかけて 21 点が購入され、永楽保全、高橋道八（二代）のほか朝日焼、丹波焼が含まれる。1899 年 2 月には 10 点が購入され、景徳鎮青花花鳥文稜花中皿や京焼と考えられるものが含まれる。1901 年には璋州窯呉須赤絵花卉文皿 1 点が寄付される。1902 年 3 月には 4

点が購入され、野々村仁清、古清水、倉崎権兵衛が含まれる。1903年3月から11月にかけて9点が購入され、御菩薩焼やアール・ヌーヴォー風の変色釉花瓶が含まれる。1904年4月から8月にかけて6点が購入され、奥田穎川、楽旦入が含まれる。同年4月に浅井良斎と東山焼各1点が寄付されている。

現在の京都市立芸術大学の前身について明治期のみごく簡単にみてみることにする。明治13年（1880）に創立された京都府画学校（東宗日本写生画大和絵類、西宗西洋画、南宗文人画、北宗狩野派雪舟派類。明治18～19年石版画科。明治21年より普通画学科・専門画学科・応用画学科）は、同22年（1889）に京都市の経営に移り京都市画学校となる。同24年（1891）には京都市美術学校（絵画科・工芸図案科）と改称され、同27年（1894）には京都市美術工芸学校（彫刻科新設、明治28年に漆工科蒔絵部及髹漆部新設）と改称される。明治42年（1909）には京都市立絵画専門学校が創立される。

このようにみてみると、京都府画学校時代から継続的に購入および寄付により収蔵が行われてきたことがわかる。この時期には基本的には絵画を専らとしており、明治28年以降は彫刻と漆工（とりわけ蒔絵）が加わったもので構成されていることがわかる。購入されたものは陶磁器を制作するための参考資料･教材としてではなく、歴史的な工芸資料または支持体に何かを描くための参考資料として購入・寄付され所蔵されたものであることがわかる。

2-2　館蔵品の概要

現状で把握できる京都市立芸術大学芸術資料館館蔵品のうち明治時代に収集されたものの概要について表（明治時代に収集された陶磁器）にまとめた。表中の註はここに記す。

(1) 京焼の陶工（1795～1854）。千家十職の一つ、土風炉師・善五郎の十一代である。

(2) 京都の町衆（1800～1873）。名を玄寧といい、嵯峨の角倉別邸に設けた窯で陶器を焼いたという。高橋道八（1783～1855）、永楽保全（1795～1854）ら時の名工を招いて作陶を学び、茶器、酒器などの陶器や、楽焼を制作したと伝えられる。器には一方堂の印があり、作風は道八との関係をうかがわせる。また、一方堂焼は、玄寧が三代道八（1811～79）に差配させて五条坂の陶工に作らせたものともいう。

(3) 京焼の陶工（1811～1879）。二代高橋道八（仁阿弥道八）の長男として京都に生まれる。初名は道三、名は光英、号は華中亭・道翁といった。父とともに五条坂の窯に作陶し、天保13年（1842）三代道八を襲名。染付・白磁・青磁・高麗焼写しなど家業として継承された作風の他、父譲りの手捻りの陶塑作品において、より写実的な成果を見せる。嘉永4年（1851）高松藩の御庭焼讃窯を指導。慶応元年（1865）仁和寺宮より法橋に叙せられ、以後「法橋道八」銘を用いる。明治2年（1869）肥前鍋島家に招聘され有田で色絵技術を指導した。明治7年（1874）隠居後は父の開いた伏見の桃山窯で作陶を続けた。

(4) 京焼の陶工（1738～1799）。寛延年間に京に出て清水焼の海老屋清兵衛に師事し、明和8年（1771）に独立して五条坂建仁寺町に窯を開き、名を六兵衛と改める。妙法院宮の御庭焼に黒楽茶碗を供して六目印を受け、天竜寺の桂洲和尚より六角内に清字の印を受ける。土焼風の抹茶器、置物などを製作。号は愚斎。

(5) 京焼の陶工（1663～1743）。一般には窯名として用いた「乾山」の名で知られる。兄は尾形光琳。乾山焼は一世を風靡する。

(6) 年代の根拠は不明。

(7) 京焼の陶工（1790～1860）。初代が亡くなった時には9歳で、すぐに家業を継ぐことは出来ず、文化8年（1811）に家業を再興し、二代六兵衛を襲名した。二代六兵衛（正次郎）は初代の作風を継承しながらも、奔放で型破りな作風を打ち出した。呉須赤絵写、南蛮写、そして晩年近く磁器焼成に成功の後、古九谷写なども果敢に試みていたことが明らかとなった。

(8) 瀬戸の陶工。瀬戸の郷地区で「真陶園」「山半」と号して磁器生産を行った窯屋の六代目。天保15年（1844）、四代半助の長男として生まれ、慶応元年（1865）六代半助を襲名する。製磁技術の開発に熱心で、黒・茶の色釉を発明している。

(9) 初代尾形周平の跡をついだといわれている。一説には大坂心斎橋筋順慶町で、猪口、湯呑などを製作した文吉が2代周平ともつたえられる。

(10) 江戸後期の尾張藩士。退隠後は清水坂にあった小金ヶ谷養老園に移り、茶の湯、陶芸を本格的に開始。自邸には「今昔庵」「舊庵」の二席を持ち、有楽流の茶の湯を嗜み、平尾数也（尾張藩数奇屋頭）、松尾宗吾（松尾流五代）、小堀宗中（遠州流8世）、不蔵庵龍渓など、流派を超えた多彩な茶人たちとの交遊が伝えられている。

(11) 京焼の陶工。亀祐・木米と共に穎川の門下。モースは「嘉介は外国風を頗るよく模し、殆ど真作に見誤る程なり」という。

(12) 初代酒井田柿右衛門（1596～1666）は、江戸時代、肥前国（佐賀県）有田の陶芸家、および代々その子孫（後継者）が襲名する名称。本名を改名して襲名している。

(13) 京焼の陶工（?～1845）。京都三条の豪商杉浦家に生まれる。京都岡崎の文山に陶法をまなび、文化のころ五条坂に窯をひらいた。

104360001000	永楽保全（1）	交趾写額梅香合	江戸時代後期(19th century)	H	4.2	W	5	D	5	購入:1894/12
104720001000	角倉一方堂（2）	染付蝦蟹図茶碗	江戸時代-明治時代(19th century)	H	7.5	W	13	D	13	購入:1894/12
105630001000	高橋道八(三代)（3）	飴釉金彩葡萄葉形鉢	江戸時代後期(19th century)	H	12	W	30	D	30	購入:1894/12
104690001000	清水六兵衛(初代)（4）	銹絵蟹図茶碗	江戸時代中期(18th century)	H	8.7	W	12	D	12	購入:1894/12
104880001000	尾形乾山（5）	色絵菊文向付	江戸時代中期(18th century)	H	5	W	18	D	14	購入:1894/12
105190001000	尾形乾山	色絵槍梅文水指	江戸時代中期(18th century)	H	24.5	W	20	D	17	購入:1894/12
105160001000	璋州窯	呉州赤絵福字鉢	中国明時代(17th century)	H	9.7	W	22	D	22	購入:1894/12
104520001000	不明	吉祥浮彫文杯		H	8.4	W	10	D	6.5	購入:1894/12
104570001000	不明	染付花唐草文香炉		H	6.6	W	6.7	D	※	購入:1894/12
104700001000	不明	鼈甲釉小鉢		H	5.8	W	11	D	11	購入:1894/12
104780001000	不明	銹絵染付鮎図茶碗	江戸時代後期(19th century)	H	8	W	13	D	13	購入:1894/12
104930001000	不明	青磁花生		H	11.5	W	19	D	※	購入:1894/12
104940001000	不明	色絵牡丹唐草文六角重箱	江戸時代後期(19th century)	H	11.3	W	13	D	18	購入:1894/12
105080001000	不明	波文鉢	江戸時代前期(17th century)（6）	H	8.2	W	16	D	16	購入:1894/12
105150001000	不明	染付蝶文皿	江戸時代後期(19th century)	H	4.5	W	19	D	19	購入:1894/12
105180001000	不明	寿字六角鉢		H	9.5	W	22	D	22	購入:1894/12
105510001000	不明	色絵花卉文皿	江戸時代-明治時代(19th century)	H	2.2	W	7.2	D	7.2	購入:1894/12
105610001000	不明	菊岩小禽菓子台		H	-	W	-	D	-	購入:1894/12
105610001001	不明	菊岩小禽菓子台		H	-	W	-	D	-	購入:1894/12
105610001002	不明	菊岩小禽菓子台		H	-	W	-	D	-	購入:1894/12
105650001000	不明	青磁平鉢		H	6.5	W	31	D	31	購入:1894/12
104400001000	京都風	瑠璃釉糸巻形香合		H	3.9	W	3.9	D	5.1	寄付:1895/05
105400001000	京都	桜花文瓢形徳利	江戸時代中期(18th century)	H	17.8	W	8.5	D	8.5	購入:1895/08
104730001000	清水六兵衛(二代)（7）	茶碗	江戸時代後期(19th century)	H	6	W	15	D	15	購入:1895/12
105640001000	川本半助（六代）（8）	霊獣飾蓋物	明治時代(19th century)	H	28	W	19	D	19	購入:1895/02
104490001000	尾形周平(二代)（9）	色絵百老文急須	明治時代(19th century)	H	7.2	W	8.8	D	8.6	購入:1895/11
105530001000	平沢九郎（10）	黒瀬戸写瓜形皿		H	3	W	27	D	27	購入:1895/03
105620001000	不明	呉州福字鉢		H	11.2	W	25	D	25	購入:1895/02
104440001000	不明	蛍手白磁杯		H	5.9	W	7.7	D	※	寄付:1895/09
129930001000	伊万里	色絵橋人物図鉢(古九谷)	江戸時代前期(17th century)	H	7.1	W	38	D	37	購入:1896/05
104860001000	御菩薩焼	銹絵染付薄文鉢	江戸時代中期(18th century)	H	6.3	W	15	D	16	購入:1896/03
105360001000	美濃窯	黄瀬戸芦文茶碗	江戸時代前期(17th century)	H	7.5	W	8.6	D	8.6	購入:1896/03
104830001000	粟田焼	銹絵染付秋草人物図水注	江戸時代-明治時代(19th century)	H	10.7	W	14	D	8.6	購入:1896/02
104800001000	楽只亭嘉介（11）	焼締若松文様急須		H	12	W	9	D	※	購入:1896/02
105120001000	酒井田柿衛門（12）	色絵梅鳳凰文蓋付鉢	江戸時代前期(17th century)	H	11.4	W	16	D	16	購入:1896/03
104870001000	水越与三兵衛（13）	赤絵瓔珞文鉢	江戸時代後期(19th century)	H	6.1	W	16	D	16	購入:1896/02
105370001000	青木木米（14）	銹絵雲鶴文急須	江戸時代後期(19th century)	H	8.8	W	11	D	11	購入:1896/03
104550001000	不明	織部釉徳利（15）		H	7.7	W	17	D	※	購入:1896/02
105420001000	不明	染付菊花文鉢		H	4	W	14	D	14	購入:1896/02
105540001000	不明	色絵皿		H	※	W	※	D	※	購入:1896/02
111810001000	不明	象嵌俵形茶碗	江戸時代中期(18th century)	H	8	W	12	D	12	購入:1896/02
104430001000	不明	瑠璃釉獅子形香合		H	4.3	W	5.6	D	6.3	購入:1896/03
105020001000	不明	唐子吉祥文香炉		H	13.5	W	18	D	※	購入:1896/03
105070001000	京オランダか	染付オランダ写水注	江戸時代後期(19th century)	H	15	W	18	D	11	購入:1897/12
104590001000	粟田口か	葵紋染付茶碗	江戸時代中期か	H	6.8	W	11	D	11	購入:1897/06
105290001000	野々村仁清（伝）（16）	黒金七宝絵茶碗	江戸時代前期(17th century)	H	7.5	W	13	D	13	購入:1897/03
104380001000	京都か	交趾写亀形香合	江戸時代後期(19th century)	H	4	W	4.8	D	3.3	購入:1897/03
104600001000	京都か	鉄絵鎬文茶碗（暦手）		H	7.9	W	12	D	12	購入:1897/04
105320001000	楽？	黒楽茶碗	桃山時代(16th century)（17）	H	8.4	W	11	D	11	購入:1897/11
105000001000	永楽回全（18）	鉄釉水指	明治時代(19th century)	H	18	W	15	D	15	購入:1897/09
104420001000	永楽保全	祥瑞写松竹梅図汁次	江戸時代後期(19th century)	H	7.1	W	5.8	D	5.5	購入:1897/12
105130001000	永楽和全（19）	色絵獅子椿文鉢	江戸時代-明治時代(19th century)	H	8.7	W	18	D	18	購入:1897/10
105010001000	押小路焼	色絵雲丸文風呂形香炉	江戸時代中期(18th century)	H	21.2	W	17	D	17	購入:1897/11
104710001000	角倉一方堂	銹絵鶴図茶碗	江戸時代-明治時代(19th century)	H	8	W	11	D	11	購入:1897/06
105600001000	角倉一方堂	加彩猿置物	江戸時代-明治時代(19th century)	H	16.2	W	13	D	21	購入:1897/07
105460001000	楽左入(楽六代)（20）	黒楽茶碗	江戸時代中期(18th century)	H	9	W	10	D	10	購入:1897/12
105340001000	楽宗入(楽五代)（21）	黒楽茶碗	江戸時代中期(18th century)	H	8.3	W	11	D	11	購入:1897/12
111830001000	楽長入(楽七代)（22）	赤楽茶碗	江戸時代中期(18th century)	H	8.4	W	13	D	13	購入:1897/11
105270001000	楽了入(楽九代)（23）	赤楽茶碗	江戸時代後期(19th century)	H	7.5	W	13	D	13	購入:1897/11

105350001000	楽了入(楽九代)・楽旦入(楽十代)	黒楽茶碗	江戸時代後期(19th century)	H	7.9	W	12	D	12	購入:1897/10
111820001000	楽旦入(楽十代) (24)	黒楽茶碗	江戸時代後期(19th century)	H	9.6	W	11	D	11	購入:1897/07
104810001000	湖東焼	染付山水図急須	江戸時代後期(19th century)	H	7.5	W	13	D	12	購入:1897/07
105170001000	酒井田柿衛門	色絵松竹梅文鉢	江戸時代前期(17th century)	H	10.7	W	22	D	22	購入:1897/05
105550001000	水越与三兵衛	呉須赤絵写魚文鉢	江戸時代後期(19th century)	H	9.5	W	24	D	24	購入:1897/09
105380001000	青木木米	急須	江戸時代後期(19th century)	H	※	W	※	D	※	購入:1897/03
105200001000	尾形乾山	銹絵染付薄文四方向付	江戸時代中期(18th century)	H	-	W	-	D	-	購入:1897/09
105200001001	尾形乾山	銹絵染付薄文四方向付	江戸時代中期(18th century)	H	-	W	-	D	-	購入:1897/09
105200001002	尾形乾山	銹絵染付薄文四方向付	江戸時代中期(18th century)	H	-	W	-	D	-	購入:1897/09
105200001003	尾形乾山	銹絵染付薄文四方向付	江戸時代中期(18th century)	H	-	W	-	D	-	購入:1897/09
105200001004	尾形乾山	銹絵染付薄文四方向付	江戸時代中期(18th century)	H	-	W	-	D	-	購入:1897/09
105200001005	尾形乾山	銹絵染付薄文四方向付	江戸時代中期(18th century)	H	-	W	-	D	-	購入:1897/09
105280001000	尾形乾山	色絵梅花文茶碗	江戸時代中期(18th century)	H	7.2	W	11	D	11	購入:1897/11
105250001000	野々村仁清	瀬戸釉筒水指	江戸時代前期(17th century)	H	17.9	W	14	D	13	購入:1897/10
105390001000	不明	染付人物図杯		H	※	W	※	D	※	購入:1897/01
111860001000	不明	馬絵茶碗		H	7.3	W	12	D	12	購入:1897/04
105450001000	不明	染付唐獅子牡丹文瓢形徳利	江戸時代後期(19th century)	H	105	W	17	D	※	購入:1897/07
105110001000	不明	火入		H	18	W	12	D	※	購入:1897/10
105500001000	不明	交趾写人物文火入		H	11.5	W	10	D	※	購入:1897/10
104660001000	不明	茶碗（御本写）		H	8.4	W	10	D	10	購入:1897/11
104900001000	不明	色絵牡丹徳利		H	11	W	20	D	※	購入:1897/11
104480001000	不明	龍文木瓜形香合		H	7.5	W	8.5	D	4.3	購入:1897/12
104770001000	不明	赤楽茶碗		H	7.9	W	11	D	11	購入:1897/12
105890001000	不明	赤楽茶碗		H	※	W	※	D	※	購入:1897/12
104960001000	不明	櫛描文水注	江戸時代前期(17th century)	H	※	W	※	D	※	購入:1897/12
105570001000	不明	色絵吉祥文六角平鉢		H	3.7	W	25	D	25	購入:1897/12
104410001000	不明	水滴形茶入		H	6.2	W	7.5	D	7	購入:1897/11
104790001000	朝日焼 (25)	波文茶碗	江戸時代前期(17th century)	H	8.3	W	14	D	12	購入:1898/09
104650001000	永楽保全	染付雲堂文火入	江戸時代後期(19th century)	H	7.9	W	11	D	11	購入:1898/03
104820001000	永楽保全	呉須赤絵写鳳凰文鉢	江戸時代後期(19th century)	H	6.7	W	13	D	13	購入:1898/03
105060001000	嘉助	釣瓶形花生		H	20.5	W	25	D	※	購入:1898/03
105310001000	高橋道八(二代) (26)	銹絵暦文茶碗	天保4年(1833)	H	7.7	W	12	D	12	購入:1898/03
104450001000	丹波焼	丹波桶形茶入	江戸時代前期(17th century)	H	8.2	W	6.8	D	6.8	購入:1898/09
105300001000	不明	染付宝珠文茶碗	江戸時代後期(19th century)	H	8	W	12	D	12	購入:1898/01
104850001000	不明	染付人物小鉢		H	6	W	15	D	15	購入:1898/03
105330001000	不明	茶碗	江戸時代後期(19th century)	H	8.5	W	12	D	12	購入:1898/03
104460001000	不明	黄釉大海茶入	江戸時代中期(18th century)	H	7.5	W	5.7	D	※	購入:1898/09
104470001000	不明	襷文茶入	江戸時代後期(19th century)	H	5.4	W	9	D	※	購入:1898/09
104580001000	不明	染付松竹梅図茶碗		H	8.1	W	9.2	D	9.2	購入:1898/09
104630001000	不明	御本写茶碗		H	8.8	W	12	D	12	購入:1898/09
104640001000	不明	茶碗（黒楽風）		H	9.2	W	11	D	11	購入:1898/09
104750001000	不明	茶碗（黒楽風）		H	8.2	W	12	D	12	購入:1898/09
104890001000	不明	赤絵山水図徳利	江戸時代前期(17th century)	H	8	W	20	D	※	購入:1898/09
104950001000	不明	色絵秋草図涼炉	江戸時代後期(19th century)	H	10.7	W	13	D	※	購入:1898/09
104980001000	不明	染付宝珠文水指	江戸時代後期(19th century)	H	14.7	W	17	D	※	購入:1898/09
105030001000	不明	瓶子形花生		H	11.5	W	24	D	※	購入:1898/09
105470001000	不明	象嵌青磁茶碗		H	6.3	W	11	D	11	購入:1898/09
105580001000	不明	山水絵長角皿		H	24	W	27	D	3.5	購入:1898/09
104990001000	景徳鎮	青花花鳥文稜花中皿	中国明時代(17th century)	H	3.6	W	15	D	15	購入:1899/02/21
104990001001	景徳鎮	青花花鳥文稜花中皿	中国明時代(17th century)	H	3.6	W	15	D	15	購入:1899/02/21
104990001002	景徳鎮	青花花鳥文稜花中皿	中国明時代(17th century)	H	3.6	W	15	D	15	購入:1899/02/21
104990001003	景徳鎮	青花花鳥文稜花中皿	中国明時代(17th century)	H	3.6	W	15	D	15	購入:1899/02/21
104990001004	景徳鎮	青花花鳥文稜花中皿	中国明時代(17th century)	H	3.6	W	15	D	15	購入:1899/02/21
105680001000	京都か	蓮図花瓶	明治時代後期(late 19th century)	H	37	W	16	D	16	購入:1899/02
106130001000	京都か	笹図水指	明治時代(19th century)	H	15.1	W	17	D	※	購入:1899/02
106150001000	京都か	牡丹図水指	明治時代(19th century)	H	13.3	W	15	D	※	購入:1899/02
106160001000	京都か	百合図水指	明治時代(19th century)	H	14	W	16	D	※	購入:1899/02
106170001000	京都か	あやめ図水指	明治時代(19th century)	H	13.7	W	15	D	※	購入:1899/02
105590001000	璋州窯	呉須赤絵花卉文鉢	明末清初(17th century)	H	11.2	W	25	D	24	寄付:1901/05
105140001000	古清水	色絵七宝透文手焙	江戸時代中期(18th century)	H	19.8	W	26	D	18	購入:1902/03/15
104970001000	倉崎権兵衛 (27)	絵高麗写水指	江戸時代中期(18th century)	H	13.7	W	18	D	※	購入:1902/03/18

105040001000	野々村仁清	御本写水指	江戸時代前期(17th century)	H	14.4	W	14	D	14	購入:1902/03/18
105440001000	不明	赤絵花鳥文角皿		H	17.5	W	18	D	3.5	購入:1902/03/15
105430001000	御菩薩焼	色絵松竹梅文四方皿	江戸時代前期(17th century)	H	2.9	W	18	D	18	購入:1903/08/21
104530001000	不明	変色釉花瓶 (28)		H	6.5	W	14	D	※	購入:1903/02
104910001000	不明	変色釉花瓶 (29)		H	9.2	W	18	D	※	購入:1903/02
105520001000	不明	染付風景陶板		H	14.9	W	31	D	※	購入:1903/02
104370001000	不明	茶入	江戸時代後期(19th century) (30)	H	5.7	W	3.4	D	※	購入:1903/10/29
104610001000	不明	茶碗（井戸風）		H	7.7	W	14	D	14	購入:1903/10/29
104740001000	不明	瓢形茶入	江戸時代前期(17th century)	H	7.5	W	7	D	※	購入:1903/10/29
104620001000	不明	茶碗（赤楽風焼締）		H	7.7	W	13	D	13	購入:1903/11/18
104680001000	不明	染付霊芝文茶碗		H	7.7	W	11	D	11	購入:1903/11/18
105260001000	奥田穎川 (31)	色絵麒麟鳳凰文花器	江戸時代後期(19th century)	H	24.6	W	8.8	D	8.8	購入:1904/08/02
105050001000	忌松風 (32)	花瓶形壷		H	18.3		14	D	※	購入:1904/04/19
105100001000	浅井周斎 (33)	交趾写鳳凰文菓子器	江戸時代中期(18th century)	H	4.1	W	18	D	18	寄付:1904/06
104390001000	旦入(楽十代)	交趾鴎形香合	江戸時代後期(19th century)	H	5.1	W	6.7	D	5.2	購入:1904/08/05
105410001000	東山焼（34）	染付船形鉢	江戸時代後期(19th century)	H	7.8	W	24	D	10	寄付:1904/10
105480001000	不明	青磁花生		H	8.5	W	22	D	※	購入:1904/05/17
104540001000	不明	染付獅子文花生		H	7.5	W	16	D	※	購入:1904/05/28
105090001000	不明（中国産か？）	小鉢		H	4.7	W	16	D	16	購入:1904/05/28

表　明治時代に収集された陶磁器

(14) 奥田穎川門下の京焼の陶工にして南画家（1767 ～ 1833)。通称木村佐兵衛、号は木米のほか青来、百六山（散）人、古器観、九々鱗、聾米（ろうべい）など数多い。江戸後期に流行した中国趣味に存分に浸って成長した木米は、書画、工芸諸般の技術を体得したが、結果としては南画と煎茶道具を主体とする陶磁器に彼の才能は絞られていった。

(15) 桃山時代の織部ではない。

(16) 京焼の陶工。京焼の色絵を大成。仁和寺門前に御室窯を設けて陶磁器を焼いた。特に蒔絵の趣を表わした絵付けに最も特色を示している。代表作に「藤絵茶壺」「月梅図壺」「雉子の香炉」などがあり、国宝などに指定されている。

(17) 年代の根拠は不明。

(18) 京焼の陶工（？～ 1876)。土風炉師 10 代西村善五郎了全 (1769 ～ 1840) の養子。上京の織屋沢井家に生まれ、文化 14 年（1817）に 11 代善五郎を襲名した。養父了全は若いとき楽了入に陶技を学び、晩年には安南写しや交趾写しを製作した。11 代善五郎も土風炉製作から陶磁製作に転じ、文政 10 年（1827）に表千家吸江斎、楽旦入、了全らと紀州徳川家に招かれて御浜御殿で製陶し、〈河浜支流〉〈永楽〉の金・銀印を下賜された。

(19) 京焼の陶工（1823 ～ 1896)。 千家十職の一つ、土風炉師・善五郎の十二代である。江戸後期を代表する陶芸家の一人永樂保全（十一代善五郎）の長男で、幼名は仙太郎。十二代善五郎を襲名したのは 1843 年であり、1871 年に息子の得全に善五郎の名を譲って隠居し、以降は善一郎と名乗った。1852 年に義弟・宗三郎（回全）とともに仁清窯跡に御室窯を築窯し、本格的な作陶活動に入った。さらに、44 歳で隠居した後も加賀大聖寺藩に招かれて山代で製陶の指導を行うなど、精力的な活動を続けた。

(20) 江戸時代中期の陶工（1685 ～ 1739)。京都の大和屋嘉兵衛の次男。楽宗入の養子となり、楽家六代をつぐ。

(21) 江戸時代前期～中期の陶工（1664 ～ 1716)。雁金屋三右衛門の子。尾形光琳の従弟。京都の楽家 4 代一入の弟子で、娘婿となり五代をつぐ。初代長次郎の作風をならい、遺作に残月亭の鬼瓦などがある。

(22) 江戸時代中期の陶工 (1714 ～ 1770)。楽左入の長男。京都の楽家七代をつぐ。明和 7 年 9 月 5 日死去。

(23) 江戸時代中期 - 後期の陶工（1756 ～ 1834)。楽長入の次男。楽得入の弟。明和 7 年京都の楽家九代をつぎ、六十余年にわたり制作にあたる。天明 8 年の大火により長次郎以来の陶土や印をすべて焼失。寛政 3 年楽家の系図「聚楽焼的伝」を作成した。

(24) 江戸時代後期の陶工 (1795 ～ 1855)。楽了入の次男。京都の楽家十代。紀伊和歌山藩で御庭焼をおこなう。藩主徳川治宝から「楽」の印判をあたえられた。「聚楽焼由緒歴代書」を作成し、楽家の系譜を整理した。

(25) 京都府宇治市で焼かれる陶器。宇治茶の栽培が盛んになるにつれ、茶の湯向けの陶器が焼かれるようになった。江戸時代には遠州七窯の一つにも数えられている。

(26) 京焼の陶工（1783 ～ 1855)。初代高橋道八の次男。陶法を父や宝山文蔵に、磁器を奥田穎川らにまなぶ。父の没後家業をつぎ、粟田口から五条坂にうつる。紀伊偕楽園焼ほか各地の陶窯で指導した。

(27) 江戸前期の陶工（？～ 1694)。出雲（島根県）の楽

山焼の開祖。単に権兵衛ともいわれる。萩焼の陶工に倉崎五郎左衛門と勘兵衛という兄弟がおり、権兵衛はそのいずれかの子息と推測されている。『倉崎家勤功録』によると、延宝5年（1677）に出雲藩主松平綱近が松江東郊の楽山に御用窯を開くにあたって、萩藩に懇望して陶工を招聘し、権兵衛が銀10枚、4人扶持で採用されたと伝える。権兵衛は楽山窯で18年間作陶したが、その作風は萩焼と同じく高麗茶碗の写しを主とし、素地も萩焼と同じ黒味を帯びた荒土で枇杷色のかかった藁灰釉を使った。

(28) アール・ヌーヴォー風窯変

(29) アール・ヌーヴォー風窯変

(30) 鉄釉茶入。年代、産地ともに不明。

(31) 江戸時代後期の陶工（1753～1811）。京都において磁器焼成を成功させたと伝えられ、青木木米や欽古堂亀祐など多くの陶工を指導した。「頴川」は号で、実家の姓（「えがわ」と読む）でもある。

(32) 7世紀代の須恵器

(33) 江戸時代中期の陶工（？～1800）。南山焼の祖。大坂の河崎屋源兵衛と称する豪商。宝暦のころ山城八幡鳩ケ峰南山に窯をひらく。漆器もつくり、書にもたくみであった。

(34) 文政五年（1822）に飾東郡東山村〔現、姫路市東山〕で窯が築かれ、そののち天保二年（1831）頃、姫路城北西となりの男山に窯が移された。男山窯では藩主の調度品や将軍への献上品など、磁器を中心に生産した。

2-3　館蔵品の特徴

2-3-1　収集作品の制作年代

作者・産地が判明している作品86点を対象に、制作年代についてみてみることとする。

7世紀代の須恵器（105050001000）を除くと、最も古いとされているのが16世紀では1点のみで、黒楽茶碗（105320001000）がある。ただし、厳密には指し示す年代の根拠は判然としない。17世紀代のものは26点あり、野々村仁清（105040001000、105250001000）、酒井田柿右衛門（105120001000、105170001000）、尾形乾山（104880001000、105190001000など）といった作者が判明するものと、黄瀬戸芦文茶碗（105360001000）や古九谷様式色絵橋人物図鉢（129930001000）、御菩薩焼色絵松竹梅文四方皿（105430001000）などがある。また、日本産以外のものとしては明末清初の漳州窯呉州赤絵福字鉢（105160001000）がある。18世紀代のものは11点あり、楽家五～七代（105460001000、105340001000、111830001000）、初代清水六兵衛（104690001000）、古清水色絵七宝透文手焙（105140001000）、御菩薩焼銹絵染付薄文鉢（104860001000）、押小路焼色絵雲丸文風呂形香炉（105010001000）などがある。19世紀代のもののうち江戸時代のものは33点あり、楽家九・十代（105270001000、111820001000など）、永楽保全（104360001000、104420001000など）、二代高橋道八（105310001000）、二代清水六兵衛（104730001000）、奥田頴川（105260001000）、水越与三兵衛（104870001000など）などがある。19世紀代のうち明治時代のものは14点あり、永楽和全（105130001000）、回全（105000001000）、二代尾形周平（104490001000）、角倉一方堂（104710001000など）のほか京焼とみられるものが含まれる。

以上のことから、17世紀以降のものが収集されていることがわかるとともに、17世紀前葉までの確実なものはない。つまり、収集の対象は仁清以降ということになる。

2-2-2　作者・産地選定の傾向

作者・産地が判明している作品86点を対象に、作者・産地についてみてみることとする。

楽家歴代でいうと、16世紀代の楽であるとするものを皮切りに、五代宗入以降十代旦入のものまで計8点が収集されている。また、野々村仁清と尾形乾山で計12点（7件）、永楽保全・和全・回全で計6点、奥田頴川をはじめとする江戸時代後期から明治時代にかけての陶工は計11点、御菩薩焼や古清水など京焼の範疇に入るものは計17点。酒井田柿右衛門や古九谷といった日本産の磁器は計3点、明末清初の青花や呉須赤絵は7点（3件）、その他浅井周斎、川本半助、倉崎権兵衛、平沢九郎、朝日焼、湖東焼、丹波焼、東山焼、黄瀬戸などが各1点みられる。

このようにみてみると、京都に関わるものが6割を占めることがわかるとともに、明末清初の磁器や柿右衛門、古九谷をはじめ国産陶磁器がみられる。蜷川式胤らの助力を得て収集された1,000点を超えるエドワード・モースのコレクション（『日本の陶磁器展：ボストン美術館所蔵モースコレクション』東京新聞、1980年。）や明治11年（1879）第2回パリ万博開催にあたって博物局によって刊行された黒川真頼著『工芸史料』（1878）やと比較すると網羅的ではないことは明白ではあるが、京都のものを中心としつつも当時の認識からは大きく外れていないことがわかる。

3　京都市立芸術大学芸術資料館館蔵品からみる明治時代の桃山陶器

以上、京都市立芸術大学芸術資料館館蔵のうち、明治時代の収集されたやきものについて取り上げた。陶磁器研究会が観賞の対象とした柿右衛門、鍋島、古九谷などの色絵磁器、仁清、乾山、道八などの京焼や、茶の湯において中核をなすやきものとしての楽焼がみられる点に

ついては先に述べたように当時の認識からすると大きく外れてはいない。また、京都のものが中心となっている点については単なる地元としての京都への称揚ではなく、当時確たる世評を得ていた仁清・乾山からの京焼の流れが強く意図されていたことを反映しつつ、入手が容易だった可能性も感じさせる。この点は本館蔵品の大きな特徴であると言えるだろう。

さて、本稿の主眼である桃山陶器の取り扱いについてみてみよう。そもそも、主たる産地である美濃産のものは黄瀬戸芦文茶碗（105360001000）のみであり、収集の意図を明確に探ることは難しい。ただ、1 点のみであることから、少なくともこの種のやきものを積極的に収集しようとしたと断ずることには躊躇を覚える。つまるところ、収集の主な対象ではなかったとみることはでき、先に述べてきたように明治期における桃山陶器に対する認識の一端を反映しているとみてよいのだろう。

本稿では、昭和初年頃まで桃山陶器が等閑視されていた現状を示す一事例を上げることになった。とはいえ、何故等閑視されるに至ったかをはじめ明らかにしていくべき点は多く、今後、資料を渉猟していく必要はあることを書き添えて擱筆する。

註

荒川豊蔵 1973「序」『美濃の陶片　–甦える志野　黄瀬戸　織部–』徳間書店。

奥田誠一 1928「東洋陶磁器の完成」『陶磁』第 1 巻第 5 号、東洋陶磁研究所。

加藤唐九郎編 1972『原色陶器大辞典』淡交社。

木田拓也 2014『工芸とナショナリズムの近代 「日本的なもの」の創出』吉川弘文館。

北大路魯山人 1931「瀬戸及び唐津」『茶わん』第六号、寶雲舎。

北大路魯山人 1940「織部の独創性」『茶わん』第一一三号、寶雲舎。

北原大輔・藤岡了一 1940『日本美術略史』（改訂縮刷版）便利堂。

小山冨士夫 1941『荒川豊蔵作陶展目録』阪急百貨店。

小山冨士夫 1979「中国陶磁器研究の展望」『小山冨士夫著作集（下）朝鮮の陶磁ほか』朝日新聞社。

田中作太郎 1942「概説」『名陶大観　第一輯　瀬戸系・備前・丹波・伊賀・信楽』博雅書房。

東京帝室博物館 1938『東京帝室博物館復興開館陳列目録　陶瓷』

畑中研究室編（京都市立芸術大学美術学部総合芸術学科畑中研究室編）2021『桃山デザイン／京都やきもの円卓会議』京都市立芸術大学美術学部総合芸術学科畑中研究室調査研究報告 5、2021 年。